

研究ノート

関ヶ原の戦いの陣立書(「大関家文書」)について

白 峰 旬

はじめに

陣立書の定義について、高木昭作氏は「戦いのために軍隊の配置や編成を概念的に記した文書。豊臣秀吉のころから江戸時代にかけて作成された。いつでも合戦(遭遇戦)に移行できるよう編成された陣押(行軍)の順に書かれていることが多い。総勢の規模にもよるが、独立した戦闘単位である手を先陣(先備)、本陣、後陣(後備)などに配置し、備や手の大将と人数などを図式的に記している。」(下線引用者)⁽¹⁾としている。

この高木氏の定義によれば、陣立書とは、①これから想定される敵との遭遇戦(合戦)に(即座に)移行することを前提として編成された行軍の順(つまり、戦闘序列)で記載されている、②独立した戦闘単位(=戦闘ユニット)である「備」(そなえ)や「手」(て)の大将と人数などを図式的に記したものである、ということになる。

この高木氏による定義の中で「図式的に記している」という点は重要であり、大将と人数などを単に羅列して記載している文書は陣立書の範疇には入らないことになる。

なお、陣立書の読み方について、高木氏は「じんだてしょ」⁽²⁾、小和田哲男氏は「じんだてがき」⁽³⁾としている⁽⁴⁾。

陣立書についての論文としては、三鬼清一郎氏の先駆的な研究業績としての論文「陣立書の成立をめぐる」(以下、三鬼論文と略称する)⁽⁵⁾がある。

三鬼論文では、①「陣立書とは、特定の合戦を想定し、そのために自己の軍勢を最も効果的に配置したもので、制定者の花押または印章が据えられているのが通例である」(下線引用者)、②「天正十二年の小牧・長久手の戦いは(中略)自己の勢力を最も効果的に配置するなかで、陣立書という文書様式が成立したものと思われる」、③「それ以後の九州・小田原陣や朝鮮出兵の際には、発向の日程を定めたものもみられる。いずれも具体的な戦闘を想定して作成されたもので、その戦闘の局面に関してのみ効力を有するものと思われる」(下線引用者)、という点が指摘されている。

このように、豊臣秀吉が発給した陣立書については、三鬼論文によって考察がされている。

また、藤田達生『戦国日本の軍事革命—鉄炮が一変させた戦場と統治』⁽⁶⁾では、①天正12年(1584)の小牧・長久手の戦い以後、豊臣秀吉は麾下大名に対して軍法と陣立書をセットで発給するようになっていた、②しかし、諸大名レベルにおいて、家臣団に対して軍法と陣立書をセット発給するようになるのは遅れたようである、③天正19年(1591)の九戸一揆への出陣に際して蒲生氏郷が軍法と陣立書をセットで発給したが、この陣立書は豊臣大名発給としては最古のものである、という点が指摘されている。このように、軍法と陣立書がセット発給され

ている点に注目した藤田氏の見解は卓見と思われる。

豊臣大名発給の陣立書としては、発給年次は不明であるが、加藤清正の陣立書（「加藤清正備陣立表」）があり⁽⁷⁾、鉄砲、騎馬などかなり詳細な数や配置がわかる規模の大きい内容であり、今後、詳細かつ本格的な検討が待たれる史料である。

そのほか、乃至政彦『戦う大名行列』⁽⁸⁾では、①参勤交代の大名行列の起源は、戦国時代から豊臣時代にあらわれた軍勢配置図「陣立書」にある、②陣立書には全隊の陣立書と単隊の陣立書の二種類の様式が存在し、全隊の陣立書は豊臣秀吉の軍隊がよく用いていた（最古のものでは小牧・長久手合戦の時のものが有名）、という点を指摘し、「慶長一九年大坂御陳押前行列之図」（慶長19年〔1614〕における上杉景勝全隊の陣立）などの陣立書について考察している。

本稿では、これまでの関ヶ原の戦いの研究史では本格的に考察されてこなかった徳川家康方軍勢の陣立を記した陣立書（関ヶ原の戦い〔本戦〕）について検討する。

本稿で扱う関ヶ原の戦い（慶長5年〔1600〕）の陣立書は、「大関家文書」（黒羽町蔵）所収のもので、文書の形態は継紙、文書の大きさは14.5×177.3cmであり⁽⁹⁾、非常に細長い形状ということになる。包紙に「増備之印」との印文をもつ朱印があるので、この陣立書は黒羽藩主大関増備（1732～64）の所持品⁽¹⁰⁾であったことがわかる⁽¹¹⁾。

徳川家康方軍勢の図示化された関ヶ原の戦い（本戦）に関する陣立書としては、他に類例がなく、その意味でこの陣立書の歴史的意義は大きいと言えよう（この陣立書について、以下、大関家本・関ヶ原陣立書と略称する）。

1. 大関家本・関ヶ原陣立書の内容

大関家本・関ヶ原陣立書は、その写真が、前掲・図録『関ヶ原合戦と大関氏』⁽¹²⁾に掲載されている。

その写真をもとに活字翻刻したものが図1である。図1を見ると以下のような諸点が指摘できる。

- (1) 徳川家康方軍勢は、「御先備」と「御跡備」に大きく分けられている。
- (2) 徳川家康の本陣の位置は記載されていないが、「御先備」と「御跡備」の間にあったと推測される。
- (3) 方位（東西南北）の記載はない⁽¹³⁾。
- (4) 年月日の記載はない⁽¹⁴⁾。
- (5) 家康の花押や印章はないが⁽¹⁵⁾、大関家本・関ヶ原陣立書の発給者は家康と推測される。よって、大関家本・関ヶ原陣立書と同じものが、家康方諸將に配付された可能性が高い。
- (6) 諸將の兵力数の記載はない⁽¹⁶⁾。
- (7) 「御先備」の諸將には△の表記がある（桑原^(マツ)（山カ）伊賀守、同相模守、猪子内匠、舟越五郎右衛門の4人は△の表記がないが、これは2列縦隊になっていることと関係すると考えられる）。後述するように、△の表記は「備」（そなえ）を意味する。△の表記は秀吉の陣立書には見られないので、徳川家康の陣立書に見られる特色と言えよう。
- (8) 「御跡備」の諸將には△の表記はなく、「一手」という表記がされている。
- (9) 「御先備」の諸將は、先頭から5列横隊－3列横隊－8列横隊－3列横隊－2列縦隊－5列横隊の順で行軍

する形になっているが、横隊で行軍するのは、敵との遭遇戦に即応する(敵を包囲殲滅する)ためであると考えられる。なお、最後の5列横隊の△の表記が凸凹に配置されている意味はよくわからない。また、先頭から5列横隊－3列横隊－8列横隊－3列横隊には、△を結ぶ横線の表記がされているが、その意味についてもよくわからない⁽¹⁷⁾。

(10)「御跡備」の諸将は1列縦隊であり(池田三左衛門の家来3人を除く)、これは「御先備」と違って敵との遭遇戦を想定していないためと考えられる。

そのほか、大関家本・関ヶ原陣立書における文の記載内容を検討すると以下ようになる。まず、「御先備」の諸将の位置の記載のあとに次の文(図1参照)が記されている(下線引用者)。

- a 其外、御譜代、大名・小身面々者右方後江下り、井伊・本多・下野守殿、
- b 是迄廿六備、人数四万余人
- c 七八丁退テ御籠立
- d 其次、大番・書院(「番」脱カ)
- e 其次、御先手西江、孫右衛門、 f 是迄御先之分

下線 a における「其外」とは、上記の諸将以外に、という意味であろう。つまり、記載された「御先備」の諸将とは別に、徳川家の「御譜代」の「大名・小身面々」が「右方後」(＝右方のうしろ)へ下がり、(その中でも中核戦力となる)井伊直政・本多忠勝・松平忠吉は(そこに＝右方のうしろ)位置した⁽¹⁸⁾、ということになる。

下線 a における、「右方後」(＝右方のうしろ)へ下がり、というのは戦略予備(或いは、戦術予備)という意味であろうか。

下線 b における「是迄」とは「御先備」の諸将まで、という意味であろう。つまり、「御先備」の諸将を合計すると、26の備(そなえ)になり、人数(＝兵力数)としては4万余人、ということになる。大関家本・関ヶ原陣立書における△の数は26であるので、△の表記は「備」(そなえ)を意味していることがわかる。

「御先備」が26の備(そなえ)で編制されていて、その兵力数の合計が4万余人ということは、計算上(平均値)は、1備＝約1538人(小数点第1位を四捨五入)という計算になる⁽¹⁹⁾。

下線 c には「御籠立」というように「御」と敬語表現で記載されていることから、この文の主語は家康と考えられる。よって、家康は7～8丁(＝約763～872m＝約1km弱)⁽²⁰⁾後方に布陣した、ということになる。

上述したように、徳川家の「御譜代」の「大名・小身面々」が「右方後」(＝右方のうしろ)へ下がり(下線 a)、としているが、これは、家康の本陣が中央に位置したため、「右方後」(＝右方のうしろ)へ下がって位置したのである。よって、家康の本陣の「右方」に徳川家の「御譜代」の「大名・小身面々」が位置したことになる。

下線 d は、家康の本陣の次に大番と書院番が位置した、という意味であろう。

下線 e は、「御先手」の西に「孫右衛門」(名字は不明)という人物が位置した、という意味と思われるが、「御先手」が「御先備」と同じ意味で使われているのかどうか不明であるため、文の意味としてはよくわからない。

下線 f は、下線 b と同様に、「是迄」とは「御先備」の諸将まで、という意味であり、「御先」とは「御先備」

という意味であろうから、26 備の諸将までが「御先備」の分である、という意味になる。

次に、「御跡備」の諸将の位置の記載のあとに次の文(図1参照)が記されている(下線引用者)。

g 其外遠州・駿州小身衆合壹万三千七百六十人

h 多芸金谷、一(市カ)橋下総守、横井伊織、同孫右衛門、同作左衛門、徳永法印一手

i (「御」脱カ)跡(「備」脱カ)御旗本ヲ除テ七万五千

下線gにおける「其外」とは、上記の諸将以外に、という意味であろう。つまり、記載された「御跡備」の諸将とは別に、遠江国と駿河国の小身衆の合計1万3760人が位置した、ということになる。

下線hは、多芸(=美濃国^{たぎ}多芸郡)の金谷(=金屋村^{かなや}=現・岐阜県養老町金屋)に、市橋長勝、横井時泰、横井孫右衛門、横井作左衛門、徳永寿昌の一手が布陣した、という意味になる。この場所は、南宮山の南東に位置している。

下線iは、「御跡備」は(徳川家の)御旗本を除いて7万5000人である、としている。

上述のように、「御先備」は4万余人(下線b)であったから、「御跡備」の7万5000人(御旗本は除く)と合計すると11万5000余人になる。この合計人数を過大と見るかどうかは今後の課題である。

2. 大関家本・関ヶ原陣立書に記された諸将

大関家本・関ヶ原陣立書に記された諸将についてまとめたものが表1である。表1では、「御先備」における各横隊、縦隊ごとにA～Fにグルーピング(=グループ分け)をおこない、「御跡備」における「一手」ごとにG～Jにグルーピング(=グループ分け)をおこなった。

「御先備」におけるA～Fの部将の人数は、A…5人、B…3人、C…8人、D…3人、E…6人、F…5人というようになり、各グループで部将の人数は均等ではない。その理由は明確ではないが、各グループで部将の人数が問題なのではなく、各グループそれぞれの合計兵力数(Aの合計兵力数、Bの合計兵力数など)をある程度そろえた可能性が考えられる。

表1を見ると、「御先備」の中で、先鋒(敵と最初に激突する)であるAグループの合計兵力数は1万3100人であり(ただし、稲葉貞通の兵力数は不明)、「御先備」における他のグループ(B～F)と比較して、「御先備」の中では最大の兵力数であることがわかる。他のグループは兵力数が不明の部将も多いが、それぞれの部将の石高を考慮すると、Aグループが「御先備」の中では最大の兵力数であることは明らかであろう⁽²¹⁾。

このように、Aグループに「御先備」の中で最大の兵力数を集中させている理由は、敵と最初に激突することを想定しているからであろう。

表1を見ると、「御跡備」の中で、最後尾から2番目の浅野幸長(I)の兵力数5000と、最後尾の池田輝政(J)の兵力数6500を合計すると1万1500人になるので、「御先備」におけるAグループの合計兵力数(1万3100人)に匹敵する兵力数になる。このように兵力数を集中させて殿(しんがり)として敵の追尾を警戒していたことが

わかる。

「御先備」における先鋒と「御跡備」における殿(しんがり)に最大兵力数を集中させること⁽²²⁾は当時の備(そなえ)の編制(陣立)を知るうえで参考になる。

表1における、木曾川渡河作戦(8月22日)と岐阜城攻城戦(8月23日)における池田輝政の組の部将と福島正則の組の部将の区分に着目すると、前者における主力の池田輝政と浅野幸長は「御跡備」に入っているのに対して、後者はすべて「御先備」に入っている。

特に、池田輝政の組の主将である池田輝政が「御跡備」における殿(しんがり)になり、福島正則の組の主将である福島正則が「御先備」における先鋒の一人になっている点は、家康方軍勢全体の編制(陣立)を見るうえで象徴的な配置と言えよう。

「御先備」には徳川系部将が入っていないのに対して、「御跡備」には徳川系部将(本多成重・本多康俊・酒井家次)が入っていることと、家康の本陣の右方に徳川譜代の大名・小身の面々(井伊直政・本多忠勝・松平忠吉を含む)が位置している点は、家康方軍勢全体における徳川系部将の配置という意味で注意すべきであろう。

大関家本・関ヶ原陣立書の史料の信憑性については、「(慶長五年)九月二十日付近衛信尹宛近衛前久書状」⁽²³⁾に次のような記載がある点が注目される(下線引用者)。

j 先手之人数ハ福嶋一番、長岡越中二番、金森法印三番、k 田中兵部其外上方之人数四万斗面々ニ備、青野カ原ニテノ合戦ニテ候、即時ニ切立得大利候、

下線jは、先手の軍勢⁽²⁴⁾は、福島正則が一番、細川忠興が二番⁽²⁵⁾、金森長近が三番としている。この点は、大関家本・関ヶ原陣立書において、福島正則がAグループ、細川忠興がBグループ、金森長近がCグループに入っている点と一致しているので、大関家本・関ヶ原陣立書の史料の信憑性は高いと評価できる。

下線kでは、田中吉政など上方の軍勢(=家康方に付いた豊臣恩顧の部将の軍勢〔つまり、徳川直系の家臣団の軍勢以外〕)の兵力数を4万ばかり(=4万くらい)がそれぞれに備(そなえ)を立てて(戦った)としている。

この兵力数4万ばかりというのは、大関家本・関ヶ原陣立書における「人数四万余人」(上記の下線b)という記載と一致するので、この点も注目されるとともに、大関家本・関ヶ原陣立書の史料の信憑性が高いことの証左になると考えられる⁽²⁶⁾。

おわりに

大関家本・関ヶ原陣立書がいつ出されたのか、という点については、家康が赤坂(美濃国)⁽²⁷⁾に着陣した9月14日と推測される。上述したように、陣立書と軍法がセットで発給されるという藤田達生氏の指摘を考慮すると、軍法も同日付(9月14日付)で出された可能性も考えられるが、会津討伐の時の軍法(慶長5年7月7日付)⁽²⁸⁾をそのまま流用した可能性も考えられる。

上述したように、大関家本・関ヶ原陣立書は、関ヶ原の戦い時における家康方軍勢の編制(陣立)を具体的に

知ることができる、という意味で貴重な一次史料であると評価できる。

大関家本・関ヶ原陣立書における軍勢の編制(陣立)という意味では、「御先備」における「備」と「御跡備」における「一手」という使い分けについて考えると、①「備」(そなえ)には、「御先備」、「御跡備」のような大きな意味(全体的な軍勢の集団)と小さな意味(△で表記される各部将の軍勢)がある⁽²⁹⁾、②「御跡備」における「一手」⁽³⁰⁾は単独の部将(家来を含む)の軍勢で編制されている(本多成重・本多康俊〔表1におけるG〕は除く)、③そのため「一手」(下線引用者)(=一つの「手」と表記していると思われる)、④「御先備」における横隊(5列横隊など)と「御跡備」における1列縦隊(各「一手」は複数の部将で編制していないので縦隊になる)は対照的であり、敵との遭遇戦を想定した「御先備」と想定していない「御跡備」との性質の違いによるものと考えられる、などの諸点が指摘できる⁽³¹⁾。

今後は、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図(『高山公実録』系布陣図、『武家事紀』系布陣図⁽³²⁾)との比較や、大関家本・関ヶ原陣立書が江戸時代中期の黒羽藩主大関増備の所蔵品になった経緯(伝来の経緯)についても調べる必要がある。また、上述したように、「御先備」の諸将は、先頭から5列横隊-3列横隊-8列横隊-3列横隊-2列縦隊-5列横隊の順で行軍する形になっているが、関ヶ原から山中付近で、こうした規模の横隊で行軍できる地形的条件の場所はどこなのかを検討する必要がある。それらの点の検討については今後の課題としたい。

【付記】大関家本・関ヶ原陣立書についての本稿での検討をもとに、徳川家康方軍勢の陣立の概念図を図2として作成した。

[註]

- (1) 「陣立書(じんだてしよ)」(『世界大百科事典』14巻、平凡社、1988年、404頁、この項目の執筆は高木昭作氏)。
- (2) 前掲註(1)に同じ。
- (3) 「陣立書(じんだてがき)」(『国史大辞典』7巻、吉川弘文館、1986年、882頁、この項目の執筆は小和田哲男氏)。
- (4) ちなみに、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年)では「ヂンダチ(陣立)」の立項はあるが(316頁)、「陣立書」の立項はない。ちなみに、前掲『邦訳日葡辞書』(316頁)では「ヂンダチ(陣立)」の意味について「戦争へ行くこと、すなわち、出陣すること」としている。
- (5) 三鬼清一郎「陣立書の成立をめぐって」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』38、名古屋大学文学部、1992年)。
- (6) 藤田達生『戦国日本の軍事革命—鉄炮が一変させた戦場と統治』(中央公論新社、2022年、174～178頁)。藤田氏からは、御高著の刊行時にわざわざ御高著を御恵送いただいたことに感謝する次第である。
- (7) 『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2(八代市立博物館未来の森ミュージアム、1997年、254号文書)。
- (8) 乃至政彦『戦う大名行列』(KKベストセラーズ、2018年、26頁)。乃至氏からは、御高著の刊行時にわざわざ御高著を御恵送いただいたことに感謝する次第である。
- (9) 黒羽町芭蕉の館第十回特別企画展図録『関ヶ原合戦と大関氏—近世大名への転身—』(黒羽町教育委員会、2000年、35頁)。以下、図録のサブタイトルは省略する。前掲・図録『関ヶ原合戦と大関氏』(10、35頁)

では、この陣立書の史料名として「関ヶ原御先備図」としているが、この陣立書には「御先備」と「御跡備」が記されているので、史料名としては再検討が必要であろう。

- (10) 関ヶ原の戦いがあった慶長5年当時の大関家の当主は大関資増であるが、大関資増は関ヶ原の戦いには参戦していないので、大関資増が家康から直接この陣立書を与えられた可能性は低い。よって、後の時代に大関増備がなんらかの方法(他大名からの譲渡、商人からの購入など)でこの陣立書を入手した可能性が考えられるが、その点の詳しい検討は今後の課題である。
- (11) 前掲・図録『関ヶ原合戦と大関氏』(35頁)。
- (12) 前掲・図録『関ヶ原合戦と大関氏』(10頁)。
- (13) 三鬼論文で紹介された小牧・長久手の戦いの陣立書(三鬼論文の史料1〔前田家所蔵文書〕)には方位(東西南北)の記載がある。
- (14) 「羽柴安芸宰相宛高麗陣立書」(名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』七、吉川弘文館、2021年、194頁)には「慶長二年二月廿一日(朱印)」の記載と押印(朱印)がある。
- (15) 三鬼論文で紹介された小牧・長久手の戦いの陣立書(三鬼論文の史料2〔慶応義塾大学所蔵文書〕、史料3〔浅野家文書(A)〕、史料4〔浅野家文書(B)〕)には「秀吉」の署名と花押がある。
- (16) 三鬼論文で紹介された小牧・長久手の戦いの陣立書(三鬼論文の史料2〔慶応義塾大学所蔵文書〕、史料4〔浅野家文書(B)〕)には諸将の兵力数の記載がある。
- (17) こうした横線の表記は、三鬼論文で紹介された小牧・長久手の戦いの陣立書(三鬼論文の史料1〔前田家所蔵文書〕、史料2〔慶応義塾大学所蔵文書〕、史料3〔浅野家文書(A)〕、史料4〔浅野家文書(B)〕)にも見られる。こうした横線の表記は、一つの軍事的集団としてまとまって軍事行動をする単位という意味なのであろうか。
- (18) 井伊直政と松平忠吉がこの位置であることを考慮すると、福島正則と井伊直政の先陣争い(井伊直政の抜け駆け)の逸話(エピソード)は、根拠のない虚構の話であることがわかる。
- (19) 前掲『邦訳日葡辞書』(311頁)には「グン(軍)」について「この語はこれだけ単独では用いられないで、複合して用いられる」としている。このことは、陣立書のように複数の諸将の軍勢を組織的に同時に運用する、という想定で記されている、と考えられる。そして、前掲『邦訳日葡辞書』(311頁)の「グン(軍)」の「例」として「(一軍、二軍)一隊、二隊に属する軍勢の一定の兵員数」(下線引用者)としているが、この「一定の兵員数」という点に注意したい。例えば、前掲『邦訳日葡辞書』(325頁)には「イチグン(一軍)」について「一万二千五百人の兵士から成る一隊」、前掲『邦訳日葡辞書』(554頁)には「サングン(三軍)」について「各隊がそれぞれ二千五百人の兵士から成る三つの軍隊」としている。この事例の説明からすると、「イチグン(一軍)」の「一万二千五百人」は「二千五百人」の誤記と思われるが、一軍=2500人というように定員数が決まっている点について、これが何を意味するのか、今後、諸将による軍勢の編制(軍勢数)と関連付けて考えていく必要がある。
- (20) 1丁=60間=約109m。
- (21) 「御先備」の全体の兵力数は4万余人(上記の下線b)であるから、4万人と考えて、Aグループの兵力数

1万3100人を差し引くと、2万6900人になり、それを5(=残りの5つのグループ〔B～F〕)で割ると5380人(=残りの5つのグループの平均兵力数)になるので、Aグループの兵力数1万3100人は「御先備」における他のグループ(B～F)と比較して、「御先備」の中では最大の兵力数であることがわかる。

(22)「御跡備」の全体の兵力数は7万5000人(上記の下線i)であるから、浅野幸長(I)の兵力数5000と池田輝政(J)の兵力数6500を合計した1万1500人を差し引くと、6万3500人になる。しかし、それぞれの石高を考慮すると、「御跡備」の残りの本多成重・本多康俊(G)、酒井家次(H)の合計兵力数が6万3500人になるとは考えられないので、6万3500人というのは家康が江戸から直率してきた軍勢(2万人か?)を含んだ人数である可能性も考えられるが、上記の下線iでは旗本を除いて7万5000人としているので、その可能性も考えにくい。よって、「御跡備」の全体の兵力数が7万5000人とするのは(上記の下線i)、過大な人数である可能性があり、その点の検討は今後の課題としたい。

(23) 藤井譲治「前久が手にした関ヶ原情報」(田島公編『禁裏・公家文庫研究』第六輯、思文閣出版、2017年)。

(24) 前掲『邦訳日葡辞書』(466頁)では「ニンジュ(人数)」の意味について「人々の数、または、大勢の人々・軍勢」としている。

(25) 下線jにおいて、細川忠興について「長岡越中」と記載しているのは、細川藤孝が天正元年(1573)7月10日に「長岡」と改称したことによる(児玉幸多監修・新田完三編『内閣文庫蔵諸侯年表』、東京堂出版、1984年、290頁)。その後、細川忠興は元和元年(1615)12月24日に「細川」に復している(前掲『内閣文庫蔵諸侯年表』、291頁)。よって、大関家本・関ヶ原陣立書において、細川忠興の表記が「長岡越中守」ではなく「細川越中守」となっている点は、同時代史料としては疑義があるが、その点については今後の検討課題としたい。なお、「(慶長5年)9月22日付細川忠利宛細川忠興書状」(『細川家史料』1〈大日本近世史料〉、財団法人東京大学出版会、1969年、4号文書)には「今度関ヶ原表にて被及一戦、悉切崩、数千人切捨為候、我々手へも首貳百餘打取候、可心安事、」(下線引用者)と記されているので、細川忠興が関ヶ原の戦い(本戦)に参戦したことは明らかである。関ヶ原の戦いにおける細川家関係の首帳としては「関ヶ原表高名覚書」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』3、八代市立博物館未来の森ミュージアム、1998年、455号文書)がある。なお、「関ヶ原役松井興長御供衆手負者交名」(前掲『松井文庫所蔵古文書調査報告書』3、453号文書)という史料があるが、史料本文中に関ヶ原に関する文言がないことと、松井興長は岐阜城攻めで負傷して関ヶ原の戦い(本戦)には参戦していないことから(前掲「関ヶ原表高名覚書」[前掲『松井文庫所蔵古文書調査報告書』3、455号文書]には「新太良様(引用者注:松井興長)御手然と無之二付、其御かつせん(引用者注:御合戦)ニ御出なく、御かうめう(引用者注:御高名)御座なき御事ニ候」と記されている)、この史料は、関ヶ原の戦い(本戦)ではなく岐阜城攻めに関する史料である可能性を考えるべきかもしれない。

(26) そのほか、二次史料ではあるが、『寛政重修諸家譜』の本多康俊の項には「また関原の役には御後備となり」(下線引用者)と記されている(『新訂寛政重修諸家譜』第11、続群書類従完成会、1965年、241頁)。大関家本・関ヶ原陣立書では、本多康俊は「御跡備」に位置しているので、この記載も一致している。

(27) 家康が本陣を構えた岡山本陣(大垣市指定史跡・関ヶ原合戦岡山本陣跡、現岐阜県大垣市赤坂町)は、海

抜 53 メートルの丘陵であり(大垣市公式ホームページの「市指定史跡・関ヶ原合戦岡山本陣跡」の解説による、<https://www.city.ogaki.lg.jp/0000000680.html>、最終閲覧日:2022年8月15日)、大垣城を見下ろす位置に築かれた(高田徹「徳川家康の陣城考—三河支配期を中心に—」、『中世城郭研究』36号、中世城郭研究会、2022年)。岡山本陣跡の現在地について、Google マップで航空写真モードに切り替えると、小高い地形になっていることが確認できる。岡山本陣跡と大垣城は直線距離にして約4キロメートルであるので、この地形的高低差を考慮すると、大垣城サイドからは斥候を出すことにより家康の赤坂着陣を視認できたであろうと推測されるとともに、家康サイドからは、家康方軍勢が大垣城を攻囲中であった状況が視認できたと思われる。なお、岡山本陣跡の遺構(概要、略測図など)については、中井均「関ヶ原合戦岡山本陣跡」、『岐阜県中世城館跡総合調査報告書(西濃地区・本巣郡)』第1集、岐阜県教育委員会、2002年、93頁)を参照されたい。

- (28) 中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻(日本学術振興会、1959年、501～502頁、502頁と503頁の間の掲載写真)。なお、関ヶ原の戦いにおける種々の軍法の分析・考察については、渡邊大門「関ヶ原合戦における軍法について」(『十六世紀史論叢』11号、十六世紀史研究学会、2019年)を参照されたい。
- (29) 「そなえ [そなへ] 【備・具・供】」には「警固の態勢。軍の構え・陣立て軍の隊列。」という意味がある(『日本国語大辞典(第二版)』8巻、小学館、2001年、463頁)。ただし、前掲『邦訳日葡辞書』(572頁)の「ソナエ、ユル、エタ(具・供・備へ、ゆる、へた)」には、このような意味は載っていない。
- (30) 前掲『邦訳日葡辞書』(639頁)によれば「T e. (手)」とは「軍勢」、前掲『邦訳日葡辞書』(640頁)によれば「T E. テ(手)」とは「軍勢の集団」という意味である。
- (31) 大関家本・関ヶ原陣立書における軍勢数の記載(「御先備」4万余人+「御跡備」7万5000人〔旗本は除く〕+小身衆1万3760人)を単純に加算すると、家康方軍勢の総数は12万8760余人になるが、この数値の信憑性についても今後検証する必要がある。
- (32) これらの布陣図の検討については、拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実—脚色された天下分け目の戦い』(宮帯出版社、2014年)を参照されたい。

表 1

大関家本・関ヶ原陣立書に記された諸将

【御先備】

	部将名	I	II	III	IV	V	備考
	A (5人)						
★	田中吉政	田中兵部少輔	三河	岡崎	10万石	4000	
★	加藤嘉明	加藤左馬之助	伊予	松前	10万石	1600	
★	福島正則	福島左衛門大夫	尾張	清須	20万石	6500	
★	筒井定次	筒井伊賀守	伊賀	上野	20万石	1000	
	稲葉貞通	稲葉右京亮	美濃	郡上八幡	4万石	記載なし	
	B (3人)						
●	山内一豊	山内対馬守	遠江	掛川	6万8000石	2600	
★	細川忠興	細川越中守	丹後	宮津	17万石	2000	
●	一柳直盛	一柳監物	尾張	黒田	3万5000石	記載なし	
	C (8人)						
★	黒田長政	黒田甲斐守	豊前	中津	18万2000石	1300	
	寺沢広高	寺沢志摩守	肥前	唐津	8万石	記載なし	
	金森長近・可重	金森法印父子	飛騨	高山	3万8000石	記載なし	
	蜂須賀至鎮	蜂須賀長門守	阿波	徳島	17万7000石	記載なし	
★	生駒一正	生駒讃岐守	讃岐	丸亀	6万1000石	記載なし	
	加藤貞泰	加藤左衛門(「尉」脱カ)	美濃	黒野	4万石	記載なし	
	戸川達安	戸川肥後守				記載なし	(注1)
	竹中重門	竹中丹後守	美濃			記載なし	
	D (3人)						
★	藤堂高虎	藤堂佐渡守	伊予	板島	7万石	1500	
	京極高次カ	京極侍従					(注2)
★	京極高知	同修理亮	信濃	飯田	15万石	1500	(注2)
	E (6人)						
	古田重然	古田織部正	美濃			記載なし	
●	有馬豊氏	有馬玄蕃頭	遠江	横須賀	3万石	2200	
	桑山元晴	^(マ) 桑原(山カ)伊賀守				記載なし	

?	同相模守				記載なし	
猪子一時	猪子内匠(「頭」脱カ)	摂津など		2730 石余	記載なし	
船越景直	船越五郎右衛門	摂津など		4640 石余	記載なし	
F (5人)						
佐久間安政	佐久間久右衛門	近江	小河	7000 石	記載なし	
平野長泰	平野権平	大和	田原本	5000 石	記載なし	
織田長孝	織田河内守				記載なし	
岡田善同	岡田庄五郎				記載なし	
?	野々山 ^(ママ) (村カ) 三十郎				記載なし	

【御跡備】

G (2人)						
本多成重	本多丹下(注3)	下総	井野	3000 石	記載なし	家康の家臣
本多康俊	同縫殿(「助」脱カ)(注3)	下総	小篠郷	5000 石	記載なし	家康の家臣
H (1人)						
酒井家次	酒井左衛門尉一手	下総	白井	3 万石	記載なし	家康の家臣 (注4)
I (1人+家来2人)						
● 浅野幸長	浅野左京大夫(注5)	甲斐	府中	22 万 5000 石	5000	
J (1人+家来4人)						
● 池田輝政	池田三左衛門(注6)	三河	吉田	15 万 2000 石	6500	

【凡例】

●…木曾川渡河作戦(8月22日)と岐阜城攻城戦(8月23日)における池田輝政の組の部将(拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実-脚色された天下分け目の戦い』、宮帯出版社、2014年、109～111頁の表3参照)。

★…木曾川渡河作戦(8月22日)と岐阜城攻城戦(8月23日)における福島正則の組の部将(前掲・拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実-脚色された天下分け目の戦い』、109～111頁の表3参照)。

A～Jの()内の人数は各グループにおける部将の人数を示す。

I…大関家本・関ヶ原陣立書における部将名の表記

II…所領がある国

III…居城など

IV…石高

V…「(慶長五年)八月二十一日付福島正則覚書」における人数(兵力数)表記(前掲・拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実-脚色された天下分け目の戦い』、115頁の表4参照)。

?…実名不明

- (注 1) 戸川達安は、宇喜多秀家の元家臣であり、この時点では、家康の「供奉の列に加へらる」(『新訂寛政重修諸家譜』第15、続群書類従完成会、1965年、278頁)という状況であった。宇喜多氏家中における戸川達安の履歴などについては、森俊弘「戦国・織豊期における宇喜多氏の家中編制(一)―主に「戸川家譜」・「浦上宇喜多両家記」を素材として―」(『岡山地方史研究』151号、岡山地方史研究会、2020年)、同「戦国・織豊期における宇喜多氏の家中編制(二)―主に「戸川家譜」・「浦上宇喜多両家記」を素材として―」(『岡山地方史研究』152号、岡山地方史研究会、2020年)、同「戦国・織豊期における宇喜多氏の家中編制(三)―主に同時代史料及び「宇喜多秀家土帳」の検討を通じて―」(『岡山地方史研究』157号、岡山地方史研究会、2022年)を参照されたい。森氏からは、玉稿の刊行時にわざわざ玉稿を御恵送いただいたことに感謝する次第である。
- (注 2) 京極高知は「修理亮」であり「侍従」でもあるので(『新訂寛政重修諸家譜』第7、続群書類従完成会、1965年、175頁)「京極侍従」を京極高知に比定することも可能であるが、京極高次は「侍従」ではあるが「修理亮」ではないので(前掲『新訂寛政重修諸家譜』第7、167頁)、とりあえず「同修理亮」を京極高知に比定し、「京極侍従」を京極高次に比定しておく。しかし、京極高次は関ヶ原の戦いの時点(9月15日)では、居城の大津城に籠城していたため、関ヶ原の戦い(本戦)に参戦することはありえないので、「京極侍従」を他の人物に比定すべきであろうが、その点は今後の検討課題としたい。
- (注 3) 全文は「本多丹下・同縫殿(「助」脱カ)一手」である。
- (注 4) 酒井家次は、徳川秀忠に従って中山道を進軍して上田城(真田昌幸が籠城していた)攻撃に参戦した、とする史料がある(『新訂寛政重修諸家譜』第2、続群書類従完成会、1964年、47～48頁)。よって、酒井家次は上田城攻撃後に関ヶ原へ来たことになるが、酒井家次の詳しい行動履歴については今後の検討課題としたい。
- (注 5) 全文は「浅野左京大夫並家来浅野左近^(ママ)(右近大夫カ)・同左衛門(「佐」脱カ)一手」である。浅野幸長と家来の浅野忠吉・浅野氏重の「一手」ということになる。
- (注 6) 全文は「池田三左衛門同荒尾志摩・同家来日置豊前・同伊木長門・同中村主馬(「一手」脱カ)」である。池田輝政と家来の荒尾隆重・日置忠俊・伊木忠次・中村主馬(「一手」脱カ)ということになる。

図 1

大関家本・関ヶ原陣立書



其外、御譜代、大名・小身面々者
 右方後江下り、井伊・本多・下野守殿
 是迄廿六備、人数四万余人
 七八丁退テ御籠立
 其次、大番・書院
 其次、御先手西江、孫右衛門、是迄御先之分

御跡備

本多丹下・同縫殿

一手 酒井左衛門尉

一手 浅野左京大夫並家来浅野左近・同左衛門

一手

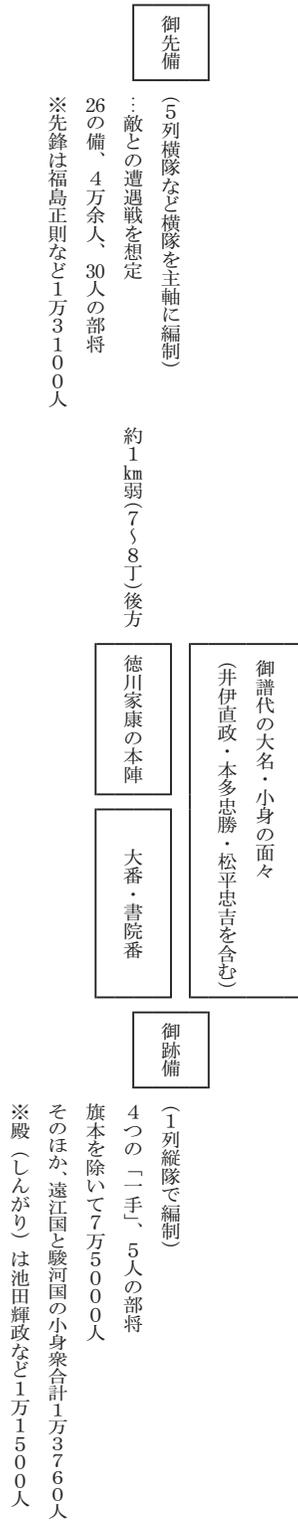
池田三左衛門

同 荒尾志摩
同 家来日置豊前・同伊木長門(「一手」脱カ)
同 中村主馬

其外遠州・駿州小身衆合卷万三千七百六十人
多芸^{タギ}金谷、一橋下総守、横井伊織、同孫右衛門、
同 作左衛門、徳永法印一手
跡御旗本ヲ除テ七万五千

図 2

徳川家康方軍勢の陣立の概念図



【追記】

本稿の内容とは直接関係ないが、関ヶ原の戦いにおける小早川秀秋の裏切りについて、これまでの通説的理解では、「合戦当日の迷いや苦悩」、「石田三成などへの不満」という言葉がキーワードになっている。しかし、小早川秀秋が家康方の調略に乗って受動的に裏切ったのではなく、主体的な判断(秀秋自身の野心や野望)によって、自信満々に裏切った(この戦いの主導権[自分が付いた方が勝利する]を握っているのは自分という思い)、という想定も考慮すべきであろう。

小早川秀秋というと愚鈍でひ弱な人物像のイメージがあるが、そうした前提を取り除いて裏切りの真意を検討すべきであろう。現在では一般的に戦国武将に対して清廉なイメージを抱きがちであるが、「裏切ること=悪」という認識は現代人の認識(或いは、江戸時代における儒教的考え方によるもの)であって、戦国時代は裏切りや寝返りがそれ程特別視される状況ではなかった点を勘案すると、関ヶ原の戦いにおける小早川秀秋の裏切りだけを特別視する必要はなからう。

例えば、イエズス会の関係史料(拙稿『『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦い関連の記載についての考察(その2)－関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況－』、『史学論叢』45号、別府大学史学研究会、2015年)や、スペイン統治時代のフィリピン総督の日本関係文書(拙稿「セビリャのインディアス総文書館所蔵「日本の諸国における当代の状況に関する報告」に記された関ヶ原の戦い関係の記載について」、『史学論叢』50号、別府大学史学研究会、2020年)における関ヶ原の戦い当日の記載を読む限り、裏切りについて小早川秀秋の迷いや苦悩や不満については全く記されていない。

小早川秀秋は裏切ることを合戦当日(9月15日)に突然思い付いたのではなく、「以前から内密に考えていた」(前掲・拙稿「セビリャのインディアス総文書館所蔵「日本の諸国における当代の状況に関する報告」に記された関ヶ原の戦い関係の記載について」と記されているので、正確に何日前という点は記載がないので裏切りを決意した正確な日付は不明であるが、以前から裏切りを決意していたものの「内密」にしていたことになる。この記載には、家康側の調略を受けて裏切った、ということも書かれていないので、裏切りは小早川秀秋が自分の意思(主体的な自分の判断)で決断したことになる。

なお、イエズス会の関係史料には「仕組まれた裏切り」、「非道なる裏切者たちの悪業」(前掲・拙稿『『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦い関連の記載についての考察(その2)－関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況－』)と記されている。